

『女性のいない民主主義』を読む

定例の研究会で取り上げることになり、写真の新書をじっくり読んだ。表紙カバー裏—日本では男性に政治権力が集中している。何が女性を政治から締め出してきたのか。そもそも女性が極端に少ない日本の政治は、民主主義と呼べるのか。客観性や中立性をうたってきた政治学は、実は男性にとって重要な問題を扱う「男性の政治学」に過ぎなかったのではないか。気鋭の政治学者が、男性支配からの脱却を模索する。

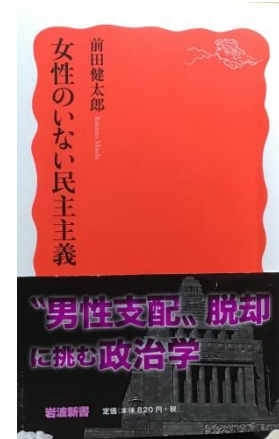
「はじめに」から一本書ではジェンダーを、女性に関わる政治争点の一種としてではなく、いかなる政治現象を説明する上でも用いることのできる視点として位置付ける。そして、ジェンダーの視点に基づく議論を、これまでの政治学における標準的な学説と対話させることで、政治の世界がどのように見直されるのかを探る。それは、常に男女の不平等に注意を払いながら政治について考えるということの意味する。

本書で議論の対象とする政治学は、「主流派」の政治学である。その中でも特に有名な学説を紹介しながら、そのつど、ジェンダーの視点に基づく批判を提示する。その狙いは、このような批判が、政治学のあらゆるテーマに及んでいることを示すことにある。それを通じて、ジェンダーの視点を持つ政治学は、標準的な政治学の扱わない特殊な争点を扱っているのではなく、むしろこれまでの政治学が扱ってきたのと同じテーマを違う角度から論じているのだということが明らかになるであろう。

本書は、4つの章から構成される。それぞれの章では、「政治」「民主主義」「政策」そして「政治家」という、政治学の教科書における定番のテーマを取り上げる。

本書を読んで、ジェンダーと政治について考えさせられることが多かった。なかでも第2章「民主主義」の定義を考え直す、本書タイトルの節に注目した。1917年4月2日、アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンは、連邦議会で「世界は、民主主義にとって安全にならなければならない」とスピーチした。アメリカは民主主義の国であり、ドイツのような権威主義体制とは共存できない。その後、アメリカはドイツに宣戦を布告した。ウィルソンの言う民主主義に、女性が含まれていない。1917年の時点で、アメリカではいまだ連邦レベルの女性参政権が導入されていなかった。ウィルソンに限らず、多くの人は、女性参政権が認められる以前から、アメリカを民主主義の国と呼んできた。

ジェンダーの視点から政治体制を見直すことは、これまで民主主義と呼ばれてきた政治体制の評価を大きく変える。そして、政治体制の歴史や民主主義の歴史を見直すきっかけを提供する。



(2020年2月14日)